緑陰随筆

沖縄と私

介護老人保健施設 あけみおの里
施設長　中村　健

沖縄との出会いは40数年前にさかのぼります。東京、池袋の西口に居酒屋「おもろ」があり、その店を訪ねたのが沖縄文化との初めての巡り合わせでした。

仕事を終え、護国寺から路面電車で池袋東口に行き、それから西口のこの店を訪ねました。当時の池袋西口は、まだ闇市の名残りがあり、物騒な感じを漂わせる地域がありました。当店は駅前といえる所にあり、安心して訪ねられました。小生が一番の年少組で、客人の多くは40歳代以上の方で、兵役につかれた人達でした。

店主はおばあでして、当日の気分によっては三線を奏で、沖縄民謡をきかせて下さった。カラカラに入った泡盛を注ぎなめながら、沖縄文化を楽しめたのは当時としては珍しく、貴重な体験でした。後に人間国宝になられた方が作られた酒器や食器でラフテイ、ミミガー、チャンプルなどを頂きました。夕鶴の原作者の木下順二をはじめ文士、ジャーナリストがたむろしていました。沖縄に関するカルチャーセンターのような雰囲気でした。新設の医学部に移ってからも、さらに東京の社保支払基金の審査委員会会場が池袋にある関係で40数年に亘って、月に1回位は当店を訪ねました。そして日本の原点、原景について考えました。

沖縄に初めて足をはこんだのは琉大の小張一峰先生が日本感染症学会を開催された時でした。この時初めて首里城址に立ち、旧王朝を偲びました。首里城近くの酒蔵を訪ね、古酒の説明をうけたりしました。クレジットカードが使える店が少なくて困惑したおぼえがあります。3泊の行程でしたので、居酒屋「うりずん」位しか覚えていません。東京ではいただけなかった泡酒や沖縄料理を堪能しました。

そして、定年退職をしてからの沖縄です。散歩で好きなスポットの一つは、首里城付近の散策です。樹木に木札がつけられ、その木の名前が親切に記入されており、樹木の名前を覚えながら歩きます。

私にとって大切なスポットは「一中健児之塔」です。養秀会館を横に見ながら階段をのぼると、前方に塔があらわれます。塔には、沖縄戦に際し軍命により、校長以下職員一同が・・・とあり、200余名の亡くなられた方々の氏名が刻まれています。この氏名の中には小生と当時同学年であった中学2年生の氏名も見られます。もしこの人達が生き残り、さらにその子孫の方々が沖縄の再建復興に参加しておられたらどうだっただろうかと思いますと、亡くなられた方々の無念の気持ちが伝わって来ます。一方は軍命により軍に協力し、この世を去り、当方は生き残り、不様に生きている。この塔の前に立つと自戒の念にかられます。

現在、高齢者の方々の介護関係の仕事をしています。入所者、通所者のほとんどの方達は戦中、戦後の苦難の時代を生きぬいてこられた方々です。想像を絶する日々を経験されたと思います。私の仕事ぶりは不十分で恥ずかしい限りです。

小生は昭和20年7月4日（米国独立記念日）の未明に、B29の空襲にあい、自宅は全焼し、身内の一人を亡くしました。コロラド州立大学医学部の小児科にリサーチ・フェローとして米国に滞在中での出来事ですが、旅先の店で買い物をしている時に小生が日本人（当時、その地方では珍しい人でしょう）とわかり、伯父が戦場で日本人に殺されたと話されました。私はB29の攻撃で家は全焼され、軍人ではない一般の人達が多く殺されました。しかし今は米国から招かれてメディカル・センターでリサーチ・フェローとして働いている。大切なことは、過去の苦い体験から2度と戦争をしないで、我々が仲良くやってゆくことだと話すと、彼の方か

ら握手を求めて来ました。この時、沖縄に関する知識は乏しく、沖縄の話ができなかったのは残念でした。

小児科医として、呼吸器感染症ことにインフルエンザ感染症の研究、そのワクチン改良の研究(国立予防衛生研究所の福見秀雄ー後に長崎大学学長ー先生が責任者・代表で数機関が参加し、東京オリンピックが開催された頃から20年程、毎年新改良ワクチンの接種と効果判定などの研究)、はしかの研究およびはしかワクチン開発(日本では東大伝研と阪大微研)のために伝研(現医科研)に出向し共同研究にあたりました。

その後、水痘さらにサイトメガロウイルス(CMV)の分離を協同で行い、これが本邦での当ウイルス感染症研究の第一歩となりました。米国で臓器移植後にCMV感染が多発し死亡者も多いため、この方面での協力を求められ協力致しました。日本では心移植の第一例が行われた年で、米国のコロラド州立大学ではすでに200例近くの症例がありました。

これまでの人生で臨床、教育、研究の面で多くの失敗とうまくいった経験があります。それらの経験が沖縄で少しでも役立てばと思っております。

大宇宙のロマン
(私の死生観)

医療法人琉心会 勝山病院
精神科　下地　寛保

山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹されば流される。意地を通せば窮屈だ。忠解に人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生まれて、画が出来る。人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。矢張り向う三軒両隣りにちらちらする唯の人である。唯の人が作った人の世が生みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりみ猶住みにくかろう。

越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容で、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。(夏目漱石・草枕前文より・新潮文庫)

また旧約聖書創生記の第1節天地の創造によれば、初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。神は言われた。「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第2の日である。神は言われた。「天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ。」そのようになった。神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。神はこれを見て、良しとされた。神は言われた。「地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ。」そのようになった。地は草を芽生えさせ、それぞれの種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける木を芽生えさせた。神はこれを見て、良しとされた。夕べがあり、朝があった。第3の日である。神は言われた。「天の大空に光る物があって、昼と夜を分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。天の大空に光る物があって、地を照らせ。」そのようになった。神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さい方に夜を治めさせられた。(中略)

このようにして神は天と地、また太陽と星、植物と動物等を創造された。その中で最も興味深いのは、エデンの園にアダムを創り、アダムの肋骨を1本抜いてイブを創られた。神の言わ

れる人類の誕生である。しかし、エデンの園には知恵を支配する悪賢い蛇がいて、アダムとイブに知恵を授けようと誘いかけて知恵のリンゴの実を食べさせたことである。人類の邪悪の根源と快楽の種が播かれたのである。

このようにして創造された人類も考古学的にみるとアフリカを起源とした原始的人類は海に出現した単細胞が天文学的な年月を経て、原始的魚類が陸地にあがり、それらが他の原始的種族へと発展し、原始的大陸の移動によって世界各地へと移動して地球の温暖化や氷河期を繰り返す天変地異の間になおも発達をとげ、原始的人類が発生し、それらの人類が世界各地に散らばっていき、人種や言語、文化の異なる現在の人間が存在するようになったようである。

しかし、天文学的な意味での人類の発生の起源はアインシュタインの相対性理論から導き出されたビッグ・バンによる宇宙発生の理論に由来するのが今や常識的になっている。即ち宇宙の源はチリが微力な引力に引きつけられて強力な塊となり、その塊がとてつもなく強大な力を持つようになり、その塊が強大なエネルギーを持つようになり、そのエネルギーが爆発して強大な宇宙線や放射線、引力を放出して宇宙の塵となって飛び散り、宇宙は混沌の世界と化した。その宇宙へ飛び散った宇宙の塵がお互いに引力で引き合い、原始宇宙で創り出されたというのである。その原始宇宙がさらに引力が引っ張り合って星や星雲が形成された。個々に創り出された星雲や星はさらに巨大化して宇宙には何千、何億という星や星雲が形成された。我々が属する太陽系は原始宇宙の中の3分の2の位置するとのことである。太陽系の星にもお互いに衝突したり、合体を幾千光年もかけて太陽を中心とした太陽の惑星として形成されたものである。宇宙には幾千万いや何億という星雲があり、人類は地球以外に地球外生命体が存在し、UFOが地球に何千年も前に来ていて、アスカの地上絵を作ったのではないかとも言われている。今は梅雨の真っ最中であり、梅雨が明ければ天空にはいろいろの星座や星雲が見られる夏空でキラキラと光り輝いていることでしょう。

しかし、この広大な宇宙の中に人類を創り出したチリやガスが存在しており、人類の身体構造と心（精神）は宇宙の何処へ死後は行ってしまうのでしょうか？人間の死後は魂は身体より分裂して宇宙に飛び散って、現世を見続けているとも言われている。

果たして人間は死後の広大な宇宙の何処へいってしまうのでしょう。宇宙には何千何億というブラックホールがあり、ブラックホールからは光さえものみ込んでしまう強大なエネルギーを持っていて、魂という得体の知れないものをも吸い込んでしまって、そこからは魂も抜け出せないでいるのではないかとたわいもない想像をしている今の私の精神状態である。死後の世界のことは神や仏様におまかせて今を生きていくのが幸であり不幸であるかも知れません。

最後に一句。

我が魂　天の空に　何処へ行く。

ハーレー・カウボーイの国のオートバイ

おおぎみクリニック
大宜見　義夫

オートバイにこだわって34年になる。本土復帰の年の7月（1972年）、オートバイでシルクロードの国々を旅することを思いついた時以来である。走行テクニック習得のため50cc原付から何台も乗り換えながら勤務先の北海道の原野を走り回った。

1974年3月、第四次中東戦争が終わり、ニクソン政権のキッシンジャー補佐官が和平に向けて世界中を飛び回っていた頃、インドからヨーロッパの終点ハンブルク（ドイツ）まで3ヶ月かけて2万3,000キロを走った。

以来、オートバイを日常生活から手放したことがない。雨以外の外出はほとんどオートバイ

を使い、車にはめったに乗らない。オートバイに乗ること自体が好きなのである。絢爛豪華な大型車には興味がなく、身の丈にあった400ccまでの中型車ばかりを選んで走りを楽しんできた。

ところが昨年、知人のハーレーダビッドソン車に試し乗りさせてもらった。ハーレーといえば、シュワルツェネッガーのような大男が乗り回すものだと思い込んでいたからこれまであまり関心がなかった。ところが、実物に乗ってみるとシート丈が意外なほど低く、地響きをたて走るパワーに圧倒された。

早速ヘリティジ・ソフテル・クラシック（FLSTC）という総重量450キロ、V型ツインエンジン1,450ccのハーレーを購入した。

初めて乗った感想は、圧倒的なパワーと重量感である。アクセルをちょっとひねるだけで半身がのけぞるほど加速性があり、車体を身震いさせながら走る様はあばれ馬に乗った感がある。この車はカウボーイの国が作ったオートバイだということを実感した。

鞍の形状をしたサドルにまたがりエンジンを吹かすと、サドルの下からドドッドッと突き上げてくるエンジン音が、馬の荒い呼吸や鼓動のように思えてくる。

ハーレーという車は決して乗りやすい車ではない。車体は重く、うっかり倒せば修理に万単位の金がかかる。計器類は少なく、スイッチ類はごっつく大きく指が届きにくい、クラッチレバーも握力を要する。始動もワンタッチではなく事前操作が必要だ。セントラルポジションへのギアシフトも微妙な足さばきが要求される。ヘルメットホルダーはなく、サイドバッグにはキーがついてない。燃費は14km/L台と悪く、ガソリンもハイオクタンが要求される。おまけに巨大エンジンの吹き出す放熱で足下が熱風にさらされる。夏場だと火鉢を抱えて走るようなものだ。

そういうハーレーの扱いにくさは日米の文化の差に由来しているのではないか。きめ細かさと手先の器用さを生かし、コンパクトで使いやすく経済的で高性能の製品を作り上げる日本人とおおざっぱで細部にこだわらないアメリカ人との

文化の差がオートバイにあらわれているのか。

日米のそういう違いを、ホテルの浴室でしばしば経験する。米国のホテルの浴室の器具は雑でおおざっぱで使いにくい。水道の蛇口はかたく開けにくい、シャワーの取っ手の位置の移動も固くきしんでままならない、洗面台の高さが異様に高すぎる、トイレの紙の置き場所が遠すぎるなど日本では考えられないほどいい加減だ。バブルの前、日本製品が欧米市場を席巻した理由の一つは消費者心理をたくみについた日本文化のきめ細かさに由来しているのではないか。

しかし、日米の文化の差に由来するにしてもハーレーはあまりに重くでっかく扱いにくい。そういう扱いにくいハーレーになぜ、人は魅せられるのか。

その魅力は、やはり強力なパワーが醸し出す圧倒的な存在感にある。重い車体にまたがり強力なエンジン音に身を揺さぶられると、血の沸き立つような効能感と高揚感が乗り手を魅了する。

450kgを超す車体にまたがり全身でバランスでとり、重いハンドルを押さえ、固いクラッチを操作し、フットボードの上のシフターレバーをかかとでカタンカタンと蹴って加速する。その感覚は、あばれ馬を制して走るカウボーイと同じだ。ハーレーにはやはりカウボーイの国の人たちの、馬への思いが込められているのだ。ハーレーがアイアン・ホースと呼ばれるゆえんである。

ハーレーのもう一つの魅力は、部品をいろいろ取りかえ自分好みのスタイルに変えるカスタム性にある。街にはカスタム化されたさまざまなハーレーが走っている。サイのような巨大マシーンが走る。ハイエナのように上半身を立ち上げた奇妙なハーレーも走る。カマキリのような貧相な奴だっている。共通項は巨大なV型ツインエンジンを車体に抱えていることだ。私はそのような大がかりなカスタムには興味はない。多少部品を取りかえて身丈に合わせて走ることができれば満足である。

重い車体にまたがり風を切って走っているとき、頭の中の雑念は吹っ飛び、自由な発想が頭の中を飛び交う解放感と荒馬を制御する緊張感とが、一体となって全身を駆け抜ける。

私は、安定性と快適性に重きをおく四輪車とはまったく別の理由でハーレーを愛用している。

53歳にして、乗る

医療法人球陽会 海邦病院
小児科　喜友名　琢也

調子に“乗る”ではないが、それに近いかもしれない。何に乗るかといえば、それはハーレー・ダビッドソンである。

昨年の5月、ある晴れた日の朝、突然、バイクに乗りたくなったのだ。休日だったので、その日のうちに、バイクショップに行って、中古の400ccのホンダを買った。もともと衝動買いをするようなタイプではないが、このときばかりは違っていた。まるで、神の啓示かなにかのように、バイクに乗ることが自分の宿命だと感じられた。ま、バカみたいなひとりよがりの思い込みではあるが、それは承知の上で。さて、実際に乗ろうとしたら、これがうまくいかない。頭では風を切ってすいすいと走る姿を描いていたのに、全然違う。エンストしそうになるは、縁石に接触しそうになるは、信号では立ちごけしそうになるはで、大変だった。狼狽した。考えてみたらあたりまえだ。バイクに乗るのは20数年ぶりだ。イメージは残っていても、年取った体がそれについていっていない。しかし、しばらくゆっくり流しているうちに、徐々に慣れてきた。昔の勘も戻ってきた。慣れるにつれ気分も高揚してきた。どんどん加速していった。道が三角になった。風が体を吹き抜けた。爽快だ。やったあ！何をやったのかは知らないが、でも思い描いたものが手に入った感じがした。

それ以来、バイクである。暇さえあれば、当

てもなく乗り回し、当然、通勤にも使っている。バイクは自然の影響をもろに受けるので、乗りこなすのは結構タフである。雨の日は乗らないが、台風の日にためしに乗ったことがある。強風をまともに受けると、意図しないのにバイクが対向車線ににじり寄っていくのでとても怖かった。台風の日はやめると決めた。暑い日も大変である。ただでさえエンジン周りやマフラーは高温になっているので、太陽の熱とバイクの熱とで二重の苦しみが襲う。走っている間は涼しく全然苦にならないから、走りっぱなしがいい。それで、信号も無視して走ることにしている。これはウソである。まあ、大変な乗り物であるが、やめないのは、走る楽しみが当然勝っているからだ。

しばらく、400ccで満足していたのだが、ある日遠出をしたとき、バイクの力不足を感じてしまい、それを期に、もっと大きいものにという考えが湧いてきた。と、思いついたらすぐに大型免許を取るべく自動車教習所に通い始めた。性急かともおもったが、なにしろ神の啓示を受けているのだから迷いがない。50過ぎて大型を取りに来るのは珍しいと教官に冷やかされても、らくらく乗りこなす若いのに置いていかれてもおじさんはおかまいなしだ。悪戦苦闘のあげくにやっとの思いで、免許を取ったら、今度やることは決まっていた。大型を取ったからといって、ナナハン（750cc）などに乗ろうという気はもうとうない。私は密かに大いなる野望を抱いていた。実は、端から決めていたのだが、ターゲットは1,450ccのハーレーだった。170cm、60kgに足りない体躯で300kgを越す重量のオートバイに乗ること自体やや無茶な話だが、調子に乗ったおじさんは止まらない。そして、あらゆる家庭内の障害（想像しないほうがいい）を乗り越えて、今年の4月、憧れのハーレー（ダイナ・ローライダー）を手に入れた。姿かたちはおとなしいタイプだが、それに似合わないエンジンの無骨な音と振動が存在感を主張している。跨ってみると、気分はあの「イージーライダー」に出てきたキャプテン・アメリカ（ピーター・フォンダ）。短足なのが随分違うが、乗っている姿は自分では見えないから、いいか。意気揚揚、走り出したのだった。

久々の400ccにも気持ちが高ぶったが、今はそれ以上の高揚感がある。本来、バイクは行先地に到達するための“手段”であるはずだが、今は乗るためだけの“目的”になっている。言ってみれば、オモチャだ。この金のかかる大いなるオモチャ、この先どのように付き合っていくか、考えるだけで楽しい。小児科の先輩の大宜見義夫先生は、アジア・ヨーロッパをバイクで走破したほどの筋金入りのバイク野郎（というかバイクおじさん）であるが、当面、金魚のフンよろしく大宜見先生についていこうと思っている。先生の周りにはハーレー仲間が集まってきている。なぜか、ハーレーに乗っているというだけで、すぐに知己の間柄となる。いろいろな人々に出会える楽しみも加わってきた。みんなでツーリングする大国林道は最高だろうな。ゆくゆくは県外にも、いやいや海外にも出かけるか。夢は膨らむばかりだ。

さあ、今日も晴れた。乗るぞ！フル装備し、エンジンをかけ、体中に振動を感じながらスロットル全開。踊躍道路に飛び出した。背中でかみさんのキツーィひと言を聞きながら。「死ぬときは一発で死んでね。」

アンリ・デュナン「ソルフェリーノの思い出」の地を訪ねて

沖縄県総合保健協会
金城　忠雄

昨秋、全国公私病院連盟の案内による「医学の歴史を巡る旅」に参加して、北イタリアはソルフェリーノを訪れることができた。主眼は、アンリ・デュナン活躍による赤十字発祥の地をこの目で確かめる事である。いまひとつは、その昔グラマー女優シルバーナ・マンガーノ主演イタリア映画「にがい米」の強烈な印象があり、水田地帯ポー川流域が舞台なのでここを旅したいとの思いもあった。

ソルフェリーノは、ロンバルディヤ平原のミラノとベネチアの中間にあり、イタリア最大の湖、ガルダ湖に近い所にある。

早速、イタリア統一の象徴エマヌエル2世戦争記念塔を訪ねることにした。ここが赤十字発祥の地ソルフェリーノ古戦場の中心地である。糸杉の林に囲まれ落ち着いた雰囲気の円筒状の高い記念塔である（写真1）。

記念塔内部は、らせん状階段があり、壁面には1859年当時、イタリア統一と独立戦争の情景、「ソルフェリーノの戦」の激戦風景やガルバルディの胸像等将軍像が多数飾られている。ヨーロッパは古くから落ち着いた国々だと思いがちだが、イタリアの統一・独立は、明治維新直前の時代である。

同行の方に93歳の老医師もおられ、重いバッグを肩に健脚ぶりには憧憬と尊敬の至りである。屋上の展望台に出ると、スイスアルプスや美しい田舎風景が目に入る。ここが悲惨な戦死傷病者を出した激戦地なのか、映画「にがい米」の舞台なのかと感慨にふける。

次に、納骨堂に行く。4万人もの頭蓋骨や身体の骨が壁面四方に並べられている。その異様な雰囲気には身の毛がよだつ。日本人には全く理解できず不気味な光景だ（写真2）。

写真1．エマヌエル2世戦争記念塔

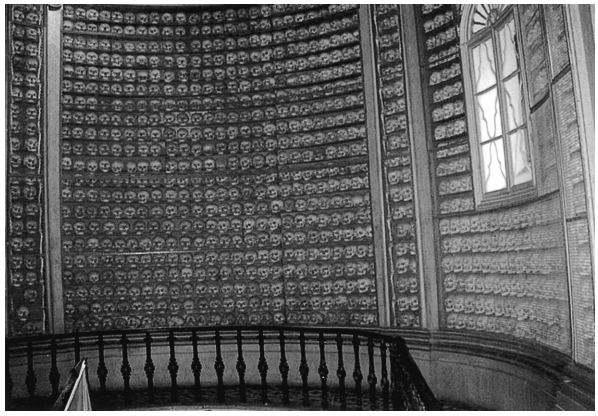


写真2．頭蓋骨展示された納骨堂

ソルフェリーノから6キロ西に行くとアンリ・デュナンが宿泊したカステリオーネの町がある。戦争当時、ここに救護本部がおかれ、デュナンは町の人々と粉骨砕身、人手不足のなか傷病兵を収容した所である。現在赤十字博物館になっていてデュナンの業績と当時の医療器具や救急馬車などが展示されている。

平日だというのに、赤十字博物館は午後3時からしか見学できないとのこと。イタリア人のシェスタ昼寝の習慣には参る。

赤十字博物館見学の前に昼食を取ることにした。同行の方に食通がおり、イタリア料理やワインに詳しく説明してくれた。食前にトスカーナのキャンティーワインを、パルマ名産の生ハムとパルミジャーノチーズにポテト、パスタにバルサミコ酢等、素養の有るソムリエのお陰で非常に美味しく楽しい昼食ができた。食後にカプチーノコーヒーをとり、心豊かにゆっくり赤十字博物館を見学することができた。

アンリ・デュナンと赤十字関連の足跡をたどってみることにする。

デュナンは、スイスの実業家ということになっている。アルジェリアに製粉会社を設立し、現地役所に土地水源の利権と開発の許可を申請するが許可がおりない。やむなく、有力者の紹介で皇帝ナポレオン3世に直接陳情のためソルフェリーノを訪れる。

1859年6月、時あたかもイタリア統一・独立の戦争、これが「ソルフェリーノの戦い」だ。アルプスを越えて来た勇猛なラデッキー将軍率いるオーストラリア軍とこれを迎え撃つサルジニア・フランス連合軍との激しい戦争だ。

デュナンは、この悲惨な戦争体験を1862年「ソルフェリーノの思い出」と題して出版し、ヨーロッパに大反響を呼び起こした。戦争が防げないのなら、国際的な救護団体を組織すべきとデュナンを中心に5人委員会が発足、国際赤十字に発展、翌1864年にはヨーロッパ諸国が参加してジュネーブ条約が調印された。

しかし、彼は赤十字創設に没頭し過ぎ会社運営に失敗、莫大な借金を抱え破産してしまった。失意の内に各地を放浪し、晩年にはスイスのボーデン湖畔の町ハイデンでひっそりと暮らしていた。

後年、ふとしたことからデュナンの養老院生活がドイツの新聞に報道された。その記事を若い頃に交流のあったアルドフ・ミューラー教授の知る所となり、デュナンを世間に紹介した。ミューラー教授の強い推薦もあり1901年に第1回ノーベル平和賞が贈られた。

ソルフェリーノという歴史的現場に立ち、国際赤十字の華々しい活躍の一方、イラク等悲惨な戦争が絶えないこの矛盾、人間の征服欲野蛮さが嘆かわしい。

観光気分で街を歩いているとgelateriaという看板が目につく、アイスクリーム屋である。例のソムリエの説明によると、アイスクリームは、イタリアで最初につくられジェラト言うと。私も街行く人をまねて色々なジェラトをためす、本場の味さすがにうまい。

中学時代の記憶にたどり、歴史とイタリア映画を見直し心豊かな旅であった。

本「ソルフェリーノの思い出」を県立図書館に求めるも、残念なことに沖縄になく県外から取り寄せた。しかも絶版とのこと学生のためにも復刻版を催促したいもの。

＜参考文献＞

1. ソルフェリーノの記念
著者・アンリ・デュナン
監訳・寺家村和子　訳・寺家村　博
メヂカルフレンド社
2. 切手が語る医学のあゆみ
著者・古川　明
医歯薬出版株式会社
3.「医学のルーツを訪ねて」
星　和夫　日本病院会雑誌　1998.10

初めての海外旅行

那覇市立病院
伊是名　博之

少し前のことですが、平成15年の秋にK先生ご夫妻、S先生と私の4人でスペインへ旅行する機会がありました。これは昭和24年生の私にとって初めて経験する海外旅行で、強烈な印象に残るものでした。

バルセロナとマドリッドに約1週間滞在。現在の状況はわかりませんが、当時スペインの治安の悪さに関して外務省からもかなり危険度が高い地域との警告が発せられていました。現地のガイドの首締め強盗にはくれぐれも気をつけるようにとの説明にK先生が「僕は日本から笛を持ってきたので強盗に襲われたらこれを鳴らす積もり」といったらガイドがにやっと笑って「アッという間に引き倒されてやられますからとても間に合わないでしょう」というものだから嫌でも緊張を強いられたものでした。初めは地下鉄が怖かったのですが、2日もすると昼間は平気で一人で乗り回してあちこち行けるようになりました。でも地下道はさすがに無理でした。みやげ物を買うのに会話の困難さにストレスを感じたのでマドリッドの三越へ入ったときのことです。入り口にいるガードマンが拳銃を携帯しているのにはビックリ。買い物が済んで出るときに、危険だからとタクシーに乗るまでガードマンがついてくるのにはまたビックリ。でも結局は一度も怖い目に会うことなくザグラダ・ファミリア教会を初めとしたガウディの建築群、プラド美術館、フラメンコ、王宮と観光を堪能しました。王宮の壮大な事は、かつて大英帝国が勃興する前は世界一の覇権を誇ったスペイン王国を彷彿させるに十分でした。名前は忘れましたが、S先生とある美術館へ行ったときのことです。玄関で落ち合う時間を確認した後は自由に行動することにしました。ゆっくり見学し、時間に合わせて玄関で待つこと30分。いつまでも出てこないので、これはてっきり首締め強盗に襲われたものと判断。展示室は大勢の人がいるのにトイレは全く人がいないので二次災害にあったらどうしようかと本当に怖い思いをして館内にあるトイレをくまなく探し回っても見つからない。警備員は英語が全く通じない。受付の案内係に友人が見つからなくて困っていると助けを求めたらやはり英語がよく通じないで、きっと大丈夫よを繰り返すだけ。最後に思いついたのは日本大使館へ連絡する事。でも電話番号は知らない。たまたま傍を通りかかったカップルに「アーユー・ジャパニーズ」と声をかけたら、必死になっている私の目つきに恐れをなしたか「違う、韓国だ」といって急いで離れ去っていきました。いよいよ絶望的な心境になってきて1時間ほど経過した頃、ひょっこりS先生が現れたではないか。なんと集合時間を勘違いしていたとのこと。がくっときた一瞬でした。でもピカソのゲルニカがスペインにあるとは思わなかったので大もうけの気分。有名な絵画だけに大勢の見学者がいるわけですが、会場は絵の前にロープを張っており少しは離れてみるわけだが、ガラスで覆って保護することなく無造作に床に立てかけてあるだけ。女性の警備員が一人いるのだが、手持ち無沙汰でぼんやりと立っているだけというののんきなところが面白い。日本だとこのような国宝級の絵なら厳重にガードされてもっと遠くからしか見れないところ。また美術館はどこでもペットボトルは持ち込み禁止。カバンに隠せば問題ないが、手に持っていたり、カバンから見えたりしたら捨てるよう神経質に要求されます。絵画に水をかけられるのを心配しているのかとおかしかった。

マドリッドの気候で面白かったのは、気温は28度で日向では紫外線も強く暑いのですが、湿度が40％前後なので汗はかかない。日陰に入ると急に肌寒く感じ、長い時間日陰にはおれないというのも不思議な経験でした。レストランで食事をするときは大変でした。高級という触れ

込みで、なるほど重厚な雰囲気でみな喜びましたがスペイン語なのでメニューの意味がわからない。旅なれたK先生が「ジャパニーズ オアーイングリッシュメニュー・プリーズ」といったらOKと奥へ行ったので一同ホッと安心。でも持ってきたのが英語メニュー。やはり洋食なので内容が今ひとつよく理解できない。緊張していたせいか、どう言って注文したのか、何を食べたのか全く記憶していません。でも居酒屋ではとても楽しめました。カウンターの上に色々な料理が皿に盛って並べてあるので、口に出さずに欲しいのを指差してポンポン注文できるのが嬉しい。治安の悪さと英語の通じないのに閉口しながらもS先生と二人で毎晩強盗に注意しながら、居酒屋や市場の食べ物屋さんでワインを痛飲したものです。スペインでお勘定はラクワンテといいます。店の女の子にラクワンテと言うとビックリしたような、嬉しそうな顔が印象的でした。

でもスペインは遠い国です。帰国の際、マドリッドのホテルの出発時間からアムステルダム、成田で乗り換えて那覇空港に着くまでなんと28時間も経過していました。

『みかんの花咲く丘』

まちなと小児クリニック
新垣　義清

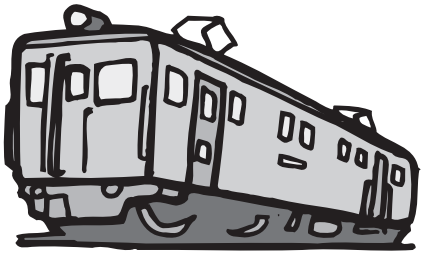
童謡歌手の川田正子さんが亡くなった。川田正子といっても知っている人は少ないかもしれないが、我々懐メロ愛好家には忘れがたい歌手の一人である。「みかんの花咲く丘」「里の秋」などの名曲は多くの人が知っているだろう。現役で活躍したのは終戦をはさんだ3～4年ほどなので勿論私はレコードでしか知らない。しかし当時は全国的な大人気歌手で、南方戦線で玉砕した兵士たちが、川田正子のプロマイドや写真の切抜きを胸にしのばせていたという逸話が残っている。彼女の可憐な歌声に、故郷の妻子や弟妹をおもいだし、つかの間の慰めを得たのだろう。敗戦が間ぢかに迫り東京が連日のように空襲にさらされていた頃、田舎への疎開を拒み防空頭巾をかぶってNHKのスタジオに通い続けていたという。「空襲警報の鳴らない日はあっても川田正子の歌わない日はない」当時の人々はそう噂しあったといわれている。

正子の代表的なヒット曲の1つが「みかんの花咲く丘」である。この歌には面白いエピソードがあるのでそれを紹介したい。登場人物は正子と作詞家の加藤省吾、作曲した海沼実の3人である。作詞家として身を立てようと上京してきた加藤はあまり芽が出ず、当時は音楽雑誌の記者をして糊口をしのいでいた。敗戦から1年後の昭和21年8月24日、取材のため東京の正子の家を加藤が訪ねてきた。1時間くらいで取材が終わり、帰ろうとした加藤の前に現れたのがこの家に居候をしていた海沼実であった。海沼は「この娘のために1曲だけ詞を書いてくれないか」と加藤に頼んだ。東京のNHKと伊豆の伊東市を結んだ2元中継放送をやるが、その時に歌う正子の歌がまだできていないという。「放送はいつだ」と聞くと、「明日」との答え。いくらなんでもそれは無理だと加藤は断った。しかし海沼は諦めない。「1回の放送に使うだけだから気楽に書いてくれ」。それでも加藤が渋っていると海沼は切り札をだしてきた。「実は親戚から戴いた赤飯があるのだが、それをご馳走するからぜひ頼む」。そして加藤の前に赤飯を出してきた。当時は現在からは想像もできないほどの食糧難の時代であった。赤飯なんて夢の中でも食べることはできない（喜びのあまりびっくりして目が覚めてしまうから）。加藤の心はぐらぐらと揺れた。ペンは剣よりも強し、食欲は性欲よりも強し。加藤はついにこの禁断の赤飯を食べてしまった。こうなればもう海沼のペースである。押し付けられた原稿用紙と鉛筆を手にして加藤はしばし黙想、幼い頃育った伊豆の海の風景を思い出しながら書き始めた。

みかん畑と白い花、海、船と黒い煙、海沼の要望する単語を散りばめながら3番の歌詞にとりかかる。「いつか来た丘　母さんと一緒に眺めたあの島よ　今日もひとりで見ているとやさしい母さんおもわれる」この3番の歌詞にこそ加藤の万感の想いが込められている。加藤の生家は元来裕福な家庭であったが、小学校5年のときに父親の事業の失敗で破産し両親は失踪。残された兄弟もバラバラになり親戚の家に預けられた。叔父の家で育てられた加藤は卒業と同時に病気の祖父と幼い妹をかかえ、両親の行方を捜しながら様々な職を転々として生計をささえていた。その時の彼の両親（特に母親）への思い、バラバラになった家族への思いがこの3番の歌詞に凝縮されているように思われてならない。、後年モノクロのテレビの時代に、我々の世代には懐かしい「怪傑ハリマオ」や「隠密剣士」の主題歌を作詞した彼に不遇な自分自身の少年時代と、テレビに群がる大勢の子供たちに対する暖かいまなざしが感じられる。

出来上がった歌詞を渡された海沼には次の難題が待っていた。曲が出来ていないのである。この人は音楽家としては素晴らしい才能があったが、1個の社会人としては少し無鉄砲な性格だったようだ。信州松代の和菓子屋の跡取り息子だったが、子供の頃から憧れていた音楽への夢が捨てきれず、妻子を置き去りにして東京へ飛び出してきた。作曲だけで生計を立てるのはなかなか苦しく、当時は弟子である正子の家に間借りをしていた。後に正子の母と再婚し2人は義理の父娘の関係になる。受け取った歌詞を持って大急ぎでGHQに行き検閲を受けた後、海沼は正子と一緒に1便しかなかった伊東行きの列車に飛び乗った。伊東までは約2時間、列車の中で海沼は必死になって曲想を練った。なかなかいいメロディーが浮かんでこない。時間はどんどん過ぎていく。ふと若い頃バイオリンでよく弾いていたオペラの曲を思い出して口ずさんでいるうちに閃いた。「これだ！」。あの軽やかな8分の6拍子の前奏が頭に浮かんだ。きっかけさえ出来れば後はプロの作曲家である。列車が伊東市に着いたときには曲は完成していた。しかし難題がもう1つ、正子に教える時間と場所がない。その夜泊まった宿には勿論ピアノなんてない。海沼は正子と一緒に風呂に入り、背中を流しながら出来上がったばかりの歌を一生懸命教え込んだ。いくら相手が小学校6年生の子供とはいえ、現在なら「セクハラ」として大騒ぎになっているだろう。（古き良き時代がうらやましいなんて口がさけても言えないが・・・）。翌日ラジオで放送された正子の歌は大反響を呼んだ。1回の放送のために作られた歌がレコーディングされ、国民的な大ヒット曲となり今日に至るまで歌い継がれている。もしあの時に加藤の取材が1日でもずれていたら、昼食の後に訪れていたら、あるいは海沼が赤飯を全部食べてしまっていたらこの名曲は生まれていなかったに違いない。歴史に「もしも」は禁句だといわれるが、「もしも」と勝手に想像しながら夢を膨らませるのは楽しい。この面白いエピソードを残してくれた3人も今は黄泉の国の人になってしまった。そして歌だけが今でも歌い継がれているのである。

（敬称略。この拙文は加藤省吾著「みかんの花咲く丘　わが人生」その他を参照にしました。）



メディア漬けと子どもの危機

小児クリニックたまなは
玉那覇　康一郎

去る5月に「沖縄県小児保健学会」に参加する機会がありました。そこで「人間になれない子どもたちーメディア漬けと子どもの危機―」という興味あるテーマの特別講演がありました。講師は清川輝基氏でNPO法人「子どもとメディア」代表理事です。その中で印象深かった事を書いてみたいと思います。

最近、毎日のように子どもたちに関わる殺人事件のニュースがあります。どこでどんな事件であったのか、日が経つにつれて忘れてしまうほど、次から次へと新しい事件が発生しています。幼児を駐車場の建物から突き落としたとか、同級生の女の子の首をカッターで切ったとか、パチンコに夢中になり、車中の乳児を熱中症にしたとか・・・。

清川氏は、これらの事件はテレビ、テレビゲーム、ケータイ、漫画、インターネットなどのメディア環境に深く関わりがあると分析しています。こうすれば人は傷付く、死んでしまう、そういう事をすると自分はどうなる、家族はどうなる・・・という思考過程が欠如しているのだと言います。

テレビやテレビゲームを見ている時の脳波と、読書や会話をしている脳波では活動場所が全く違います。テレビでは視覚中枢の後頭葉が主に働いており、人間の感情や行動をコントロールしたり、想像力を司る前頭前野はほとんど機能していないことが分かっています。その点読書や会話においては、前頭葉が活発に働いているのが脳生理学で証明されています。

従って、テレビ漬け（メディア漬け）の結果が今日の事件多発に大いに関係していると言います。言葉の訓練が出来ていないため、言葉で説明する前にすぐ手が出てしまう「新しいタイプの言葉遅れ」、外遊びが少なく、家でファミコンに明け暮れる「人間関係がつくれない子どもたち」が急増しているという事です。最近、表情がない、言葉が遅い、視線が合わない、テレビを消すと嫌がる、一時もじっとしていない、呼んでも振り向かないなど、特徴的な症状の乳幼児が目立ってきているようです。

そこで「メディア漬け」の4つのチェックポイントがあります。①乳幼児からテレビやビデオに子守をさせていた、②朝から晩までほとんどテレビをつけっぱなしの生活をしている、③子どもが早期教育ビデオにはまっている、④両親ともそろってテレビ好き。このようにメディア漬けが、子どもの発達障害である「テレビ・ビデオ育児症候群」につながり、今日の様々な事件と深く関わっているのではないかと危惧しているのです。

文部科学省もこれらの現象を懸念しており、「早寝早起き朝ご飯、テレビを消して外遊び」という文言で警鐘を鳴らしています。一昔前には当たり前の習慣でしたが、その習慣が今やほとんど薄れてきています。清川氏はまず、「ノーテレビデー」（月に1日、朝から晩までテレビを見ない日を作る。）を設定することで、徐々に子どもたちは変わっていくと言っています。その習慣の復活こそが将来を担う子どもたちを健全に育成していく根本的課題だと捉えています。

1999年に米国小児科医会が「2歳まではテレビ見せるべきではない」と強く警告しており、2003年には日本小児科医会も同様なポスターを作製しています。「メディア漬けから抜け出して、遊びや仲間づくり、自然体験や文化活動などの生き生きした生活を広げましょう」と提案しています。

思い起こせば我が家もメディア漬けでした。子どもたちはもうすでに成人しており、気付くのが遅かったと後悔していますが、近い将来孫から実践させようかと密かに決意しています。

「生老病死」と生かされる命（使命～命を使い切る）

医療法人 琉心会 勝山病院
山城　竹信

昭和42年4月、沖縄を離れ北海道へ渡った名護マサー（ヤマトゥンチューやナーファンチューに負けてたまるかの開拓精神を持ったナゴンチューの心根と思われる）の一人が約35年ぶりに母の健康をきづかいながら故郷へ帰ってきた。その比嘉敏夫（勝山病院）院長から県医師会報へ随筆を書いてもらえないかと依頼され、若干躊躇しましたが一筆書くことにしました。

実は、約30年間、産婦人科を専門として仕事をこなし、ここ10年は那覇市小禄で分娩を取り扱うクリニックを開業していましたが、十二指腸を切除する大病を患い半年前に診療所を閉鎖しました。現在、「あけみおの里といわれる山紫水明の地、名護」の屋部で体力の回復の意味もこめ老人内科の診療にチャレンジしています。ただ宿命とは言え、全速で走っている車が事故をおこすや、相手の方や道路、家屋などもろもろの環境にまで迷惑をかけてしまうのと似て、同僚の医師、その団体また金融機関、各職場などのサポート機関にまで、物心両面にわたり迷惑をかけていることをお詫びするものです。その償いは医療界で仕事をこなし社会に貢献することではなかろうかと思っています。

仏典には「獅子、身中の虫・・・。と同様、蟻の穴一つからでも水漏れが起こると。それ故、宿命たる病気も含め、生活においてもミスを犯さぬよう、先々の用心が大切である」と。宇宙という生命体の運行が起こす地震や集中豪雨などのため環境は破壊され生活の歯車に狂いが生ずるのと似て、人体も病気の発見が遅れ死でもって全てを失うこともあります。

私も十二指腸乳頭部の閉塞で生命の代謝に狂いが生じ、手術をせざるをえなくなりました。よく外来において医師自らが病気の体験を話すと、患者からみた眼には「医者の無用心」と映るようです。しかし私は医師自らが体調不良を感じ、忙しい日々の診療をしながら早期診断をつけ手術を選択し大事に至らなかったのは仏の説く「命にやどる宿業」を「転重軽受」したのであろうと感ずるものです。そのような事に出会ったことで、人は人生においていろいろな障害にあいつつも、それらを乗り越えて肉体の死を迎えるとき「自らの使命に生ききったと感じられる境涯になり、」安心立命の心で命が終わるのではなかろうかと思うようになりつつあります。

自らの意思で人生を選択していろいろ行動をしているつもりですが、他の動植物と同じく、我々の意志以下の深いレベルでは「桜梅桃李の己己の当体を改めずして無作三身と開見すれば是れ即ち量の義なり」といって桜は桜、梅は梅とその生命の特質にあった生活パターン（ナンクルナイサという自然体～道は必ず開ける）になって生を全うすることになるのであろうと思う体験でした。

今、壮年の私は、病室で80歳代の老人（認知症、脳血管障害後のリハビリなど）の姿をみて、人生の後半期をよりよく生きるにはどのような生活態度で生きてゆくのがよいのか模索しています。そして30～50歳代の人々の予防医学の手助けになるようにそれらの診療体験を語っていきたいと思います。また「名護マサーの心意気」のサポーター的存在として努め、老人介護の医療を充実させることで、この国を発展させた親の世代への団塊の世代の恩返しになると思う。そのためにもサムエル・ウルマンの「青春とは人生のある時期ではなく心の持ちかたをいう。年を重ねただけで人は老いない。理想を失うとき初めて老いる。」との言葉を噛みしめ「心の老々介護」にならぬよう頑張りながら勝山から望む名護湾の美しき青空を仰いでいる。

わが青春のカタルシス

しろま小児科医院
城間　昇

ゴールデンウィークに乗り合わせたANA の機内誌に、中国の有名起業家が座右の銘としている老子道徳経の一節が紹介されていた。「大成若欠　大直若屈　大巧若拙　大弁若訥」

「真に完全なるものは欠けたところにあり、真に真っ直ぐなものは曲がっているかのよう。真に巧妙なものは下手くそに見え、真に雄弁なものは口下手である。」

ものを見たり考えたりするとき既成概念や固定観念に縛られるな、ということか。

選択・決断の連続と表される人生においても然り。個人は「歴史」という大海のうねりの上を漂う一枚の葉っぱにすぎない。個人は大きなうねりの上で次々と展開される様々な局面に対し、自分なりに見て考えて、選択・決断し行動する。その「結果」が個人の人生模様となる。したがってその模様を、何人たりとも予見することは出来ない。

各々の自分史を紐といてみて、今だから話せる今だから許される青春の蹉跌があるのはおそらく私だけではないだろう。私は、山口県の片田舎に生まれ地元の高校を卒業する数ヶ月前まで、世の荒波をさほど意識することなくのんびりと過ごした。ところが、である。東大医学部インターン制度の見直しの要求に端を発した学生運動が、団塊の世代の様々な矛盾を含みつつ全国のキャンパスに飛び火し、くしくも大学受験のその年（昭和44年）は、史上初めて東大の入試が行われなかった（したがって同期の東大入学者はいないのだ）。この年に限って言えば「ドラゴン桜」の話は、はなから成り立たなかったのである。世の中で戦争以外にも起きてはならないことが実際起こったことを目の当たりに見て、このとき初めて人智ではどうすることも出来ない「歴史のうねり」というものをはっきりと感じ取った。そしてわれわれ団塊の世代の受験生は志望校など選択することも出来ず、声なき叫びを発しながら全国へ散らばっていった。私はといえば気がつけば南のK大学に籍を置いていた、しかも法律学科に。よし、こうなったら司法試験を目指したるでーと、仲間8人で勉強会をもった。コーク杯片手の討論（ディベート形式）で夜が明けるのもしばしばだった。夏季休暇直前のある日、勉強仲間の一人S君が「きょうで皆とお別れだ。俺、どうしても医者になりたいんだ。」と言って我々の前から姿を消した。彼以外にも2人、やはり医学部を目指してキャンパスを去っていった。その後も大学紛争はくすぶり続け、大学生活は自他ともに混沌を極めた。私には無縁と思われた学生運動も「沖縄返還」の四文字を突きつけられると無視は出来なかった。ある日機動隊に取り囲まれながらジグザグ行動をとるデモ隊の真ん中に、青ざめた顔の自分がいた。右隣の瞳のキラキラした女子学生の先輩が、機動隊のごぼう抜き攻撃から私を守るべくぎゅっと固くスクラムを組んだので私の右ひじが先輩の柔らかい部分に触れてしまい、その心地よい感触に軽い眩暈と少々うしろめたさを感じながら「沖縄返還！」と必死に叫んでいた。世間の隅々に至るまで月日は平等に過ぎ、大学構内も学生生活もそれなりに落ち着いてきた。私は講義と勉強会、それに軽音楽バンドでのギター練習に熱中していた。そんな2年目の初冬のある夜、バンドで一番人気の女子学生の誕生パーティで会場の自室は盛り上がっていた。下心ありありの男子学生（やんぬるかな、私もその一人だった・・・）が彼女を囲んで耳心地よい言葉を浴びせかけていた。突然、「おい、助けてくれ。一緒にゲバッテいたA君がM派のやつらに拉致された。」と叫びながら全身血だらけのヘルメット姿の男が部屋の中へ倒れこんできた。すぐさま抱き起こし覆面のタオルを取ってみると、なんとクラスメートのS君だった。S君はK派の熱心な活動家だった。拉致されたA君も同じク

ラスメートだった。そのころ学生運動は方針の違いからいくつかの派閥ができていて、内部闘争（内ゲバ）が絶えなかった。その夜もK派とM派の内ゲバがあり、A君が拉致されたらしい。助けてくれといっても警察に届け出るわけにはいかず（大学構内に機動隊が入ることは大問題だったのだ）、かといって見殺しにはできないし、そうこう思い悩んでいるうちに「A君が可哀そう。」と彼女が泣き崩れてしまった。その光景を見て、私は即決断した「よし、彼女のためにも」。酔いはすでに醒めていた。「エーイッ！」と自らに気合を入れて部屋から飛び出し、大学めざして一目散に駆け出していった。M派のアジトの灯りが近づくにつれ、だんだん向かう足が重くなっていった。「ひょっとしたら僕もリンチに遭うんじゃあないか」そう考え始めると背筋に冷たいものがはしり、一人で飛び出してきたことを後悔した「おまえは彼女にいいところを見せたいだけなんだろう」。やっとアジトの入り口にたどり着いたものの中に入る勇気がなく、あたりをウロウロオロオロしていた。「中に入りきらんと？」いつの間にか後ろにN君がいた。N君はバンドのメンバーで彼女のとりまきの一人ではあるが気弱で、いつも遠くから彼女を見ていた。「僕が入ろうね。」と、彼はスタスタと何の躊躇もなく入っていった。「ちょっ、ちょっとー。」私は慌てて彼の後を追った。「すみませーん、誰かいませんか？」私は隠れる場所もなく、彼の背後で震えていたようだ（そのように記憶している）。「彼はもう帰したよ。」意外とのんびりした声が奥から響いた。「そうですか、ありがとうございます。」と言ってそそくさとアジトを出た。外に出た途端、極度の緊張から開放されてか足元がふらついた。「なんでありがとうなんや」咄嗟にそう言った自分が情けなくて無性に腹が立った。「彼に借りができたな」彼の勇気ある行動を認めざるを得ず、すこし嫉妬した。そして不純な動機からとった行動は決して結実しないことを身をもって知り、そんな自分が無性に恥ずかしく情けなかった。その夜はどうしても部屋に帰ることが出来ず、行く先の見えない暗い道を泣きながらどこまでも彷徨った。

その後、弁護士にはなれず社会人から一念発起して医者になった。でもこんな大きな紆余曲折がもとより計算できていたわけではない。人生は選択・決断の連続である。しかし、信念と努力なくして真摯な選択などあり得ない。

レトロ

那覇市立病院 小児科
屋良　朝雄

最近、梶尾真治の「黄泉（よみ）がえり」、重松清の「流星ワゴン」、浅田次郎の「地下鉄に乗って」など、亡くなった人たちが蘇ったり、過去の時空をさまよったりするような内容の、いわゆるレトロ調の文庫本に、結構はまっていた。それが関係あるのかどうかわからないが、十数年もダンボール箱に閉まっておいたレコードたちが懐かしくなり、久々に取り出してみた。レコードプレーヤーはすでに処分してたため、電化製品店で廉価なプレーヤーを新たに購入した。久しぶりにレコードに針を落とす瞬間は何とも言えぬ感慨深いものがあった。同時に様々な事柄が走馬燈のごとく蘇ってきた。

もう何年が経ったのだろう。あの喧騒と緊張感が漂うような日々よ。

実家は、悪名高き（？）コザの中の町の、空港通り（かつての第二ゲート）に面した一角にあり、そこでビリヤード場と氷店を営んでいた。周りは喧騒な飲み屋街で、外人や酔っぱらいの罵声が響き、ジュークボックスからは流行りの音楽（今となってはオールディーズ）が必要以上の音量で流れていた。こんなところで、少し屈折した青春時代を過ごした。飲み屋街、紫のディープなロック、コンディショングリーンの狂気沙汰、喜納昌吉のハイサイおじさん、

やーさん、客引きボーイそしてヤンキーたちがうろつき、何はともあれ、活気はあった。浪人時代や大学の帰省時には、時々、ビリヤード場の手伝いをしていた。店は、外から丸見えのオープンな作りであったためか、陰湿感は余りなく比較的気軽に人が出入りした。界隈のたまり場となり、様々な人たちが店に立ち寄っては、ゲームに興じたり、プロ（お金を賭けたハスラーたち）のゲームを見物したり、雑談したりといわゆるコミュニティ？？のような空間を造っていた。景気が良かったせいもあるが、そこは、コザの凝縮版の如く、うちなーんちゅ（沖縄人）以外に、多くの外人たち（アメリカ人、インド人、中国人、フィリッピン人など）が出はいりしチャンプルー化していた。近くでけんかなどがあると（外人とのいざこざが日常茶飯事であった）、キュウ（玉突き棒）を持ったまま現場に駆けつける輩もいて、凶器にならないか、折られはしないかなどと気をもんだものである。一方、プロ達のゲームは、しばしば芸術の域に達しており、玉を打つ（ショット）瞬間の沈黙は厳かであり、彼らは実に格好が良かった。ラック（玉の並べかた）が悪いとせっかくの勝負に水を差すことになり（ビリヤードのわかる人は理解できるはず）、仕事とはいえ冷や汗をかきながら玉を並べたことを思い出す。私自身はビリヤードでの賭けはしなかったが、ひとりで来た客（ほとんどが淋しい外人）を相手に、その人に勝った時だけ料金を払ってもらうルーズペイという方法でプレイをしていた。一方ビリヤード場は、そこに出はいりする雑多なヒト達を興味深く観察しうる空間でもあったような気がする（結局のところ、ヒトに有意差はないと思った）。いろいろと想い出の多いビリヤード場ではあったが、1978年頃、わが親父はあっさりと店を畳んだ。

それからしばらく経った頃から、北谷などの近隣町村の発展に反比例するように、旧市街地である中の町は次第にゴーストタウン化していった。世の哀れみを感じていたが、数年前からコザの再活性化を目的に、音楽や芸能そして国際性を前面に押し出した「中の町ミュージックタウン整備事業」のアドバルーンが打ち上げられた。当初はその計画に反対していた頑固な親父も仕方ないかとあきらめ、結局のところ、予定地の一角を占めるわが実家も立ち退くことにあいなった。工事が始まっているらしいという噂にも、なかなか足を運ぶ気になれなかったが、最近久しぶりに実家跡地へ行ってみた。すでに跡形もなく取り壊され、さら地になり、そこにはいくつかの重機が置かれていた。さすがに云いようのない悲しみを覚えた。ゴーストタウンなら、まだ語れる術もあるが、町の面影が完全になくなった今、もうどうしようもないのである。ひとつの物語は間違いなく終焉を迎えるであろう。人の記憶もいよいよ曖昧でどんどん失われてゆくに違いない。

あれは何だったのだろう。うちなーんちゅと外人たちが、お互いを小馬鹿にし合いながら、適当にやっていた絶妙なバランスよ。それは、あの頃あの町にどっぷり浸かっていた人々が感じた不可解な感覚だったのだろうか。さて、過去を懐かしむ機会が増えている今日この頃ではあるが、どんな意味があり、どんな落としどころがあるのだろう。あれから、自分は頑張ってきただろうか？今は充実しているだろうか？あとどれくらい働けるだろうか？そんなことを考えながら、ノイズの入った懐かしのレコードに耳を傾けている。

1970年12月20日、あのコザ騒動があり、家の前の道路でも、外人車が赤々と燃えていた。高校二年生の私は、複雑な想いで見やっていた。遠い遠い昔のことである。

人生の秋

太田小児科医院
太田　計

イベリコ豚を食べた。那覇のとあるレストランのメニューに書かれたイベリコ豚の文字に興味を引かれウエイターに尋ねようとすると、横から娘が「スペインあたりの黒豚だよ。」と言う。放し飼いで、しかも森のどんぐりの実しか食べないから、肉質が良くとても風味があるとのこと。

さっそく料理してもらい、選んでもらったワインと共にいただいた。これぞまさに天賜の口福。娘の薀蓄を聞かされながら食べるとますますおいしく感じられるから男って単純ですね。

次はバスク豚とやらに挑戦してみましょう。

ところで、最近とみに娘たちから教えられる事柄が多くなりました。数年前に50を超え、子ども達も、一人、また一人と成人し、騒々しかった休日の家には音もなく、雨足の強弱だけがやけに響きます。そんな日は思わず「青春とは若さである。」などという言葉が心をよぎります。「青春とは人生のある期間ではなく心の持ち方を言う。」もう聞き飽きて陳腐な響きになってしまった表現ですが、周りの先輩方や同僚の先生方をみていると活動的で万年青年そのままの方々が大勢おります。それに比べ私の場合は、いつの間にか進化することを放棄して、小さなバージョンアップも止め、古い知識のままこの仕事をしています。その知識も硬直化し次第に削りとられ、行動もパターン化され、それはとても危ない状態。何とかしなくてはと、ここまで書いて思い出しました。誰の言葉か分かりませんが、私のメモ帳に走り書かれた文字「人は心が弱くなった時なぜか言い訳をしたくなる。事が上手く運ばず袋小路に入ったとき知らずに愚痴がこぼれそれがいつの間にか言い訳になっている。言い訳を重ねているうちに自己弁護、さらには自分の正しさへの主張そして人の非を責める口調にさえなってくることがある。」

あぶないですね、自慢の愚痴と言い訳をつらつら書き始めるところでした。

室閑になった子供部屋を横目に、去来する一抹の静寂感が、人生の秋の気配を感じさせたのでしょうか。元気な先生方をついつい羨ましくも思います。

人生の秋といえば、もう一つ、「本は市井に返せ」という昔の言葉が浮かんできます。私の書棚には返すほどの本の数はもちろんのこと、高価な本、希少な本もありません。仕方なくその意を酌んで「本」を「知識」に置き換え、私の知っていることは惜しみ無く職員や患者さんに与えようという気持ちを思い立ちました。ところが、ここでもやはり、日ごろのけちな性格と分け与えるほどの知識の無い現実に邪魔をされております。結局今まで通りですね。

挨拶で始まり、診察し、見立てを述べ、相談し、別れの挨拶で終わる。昔からの診察風景ですが、この数年、若い頃に比べ少しは自信を持ちながら仕事が出来ているのは知識面・技術面の進歩があるからではなく、「自分の医療」に対する基本的な考え方に振れが少なくなり、何か吹っ切れた感覚のようなものが迷いや不安を静めてくれるようになってきたからでしょうね。

娘達に教えられることの多くなったこの頃、診察台に座る小さな子どもの一言からも豊かな感性を味わえるようになったように思います。

来る人生の秋がますます暖かくなるように・・・などと夏真っ盛りの中、トンだ話になりましたね。

最近思うこと

平田胃腸科・内科
平田　晴男

早いもので、医師になって今年で23年目を迎えた。振り返ってみると、中部病院での研修医時代は、病院の宿舎に寝泊りし、早朝から深夜まで、救急外来・入院患者の対応に追われ、ヨレヨレの白衣で、病院内を走り回ったものであった。大学で学んだ教科書的知識は、実際の患者様を目の前にすると全くの無力で、毎日が医師としての新たな勉強・試練の連続であった。研修1年目（インターン）で、最初にローテーションで回った部署は、救急センターであった。初日に、若い男性が救急車で、腹痛～背部痛で搬送されてきた。何を、どうしていいかわからず、頭の中が真っ白になり、血管確保もできず、先輩医師やナースにどやされながら、ただ、先輩医師に言われるがまま検査・処置したことを思い出す。（ちなみに患者様は、尿管結石であった）。いろいろな、症例の積み重ねや先輩医師・ナースに怒られながらも、1年たつと、それなりに医師としての知識・技術が身についていくことが、実感できた。体力・気力とも充実した時であった。季節感の乏しい病院の中で、今でも思い出すのは、夜の8時頃、病棟回診中に遠くからエイサーの太鼓の音がかすかに聞こえたり、手術室で若い女性患者の日焼けした水着のあとを見て、「夏なんだなー」としみじみ感じたことである。仕事が一段落した深夜、同期の仲間と連れ立って、中之町の酒蔵で、遅くまで飲み明かしたのもいい思い出である。

卒後、3年目に、初めて、診療所勤務を命じられ、渡嘉敷診療所に赴任した。毎日、戦場のような中部病院から、1日10人余の外来患者で、しかも大半が、高齢の慢性疾患の患者。最初の頃は、戸惑いと、（同僚の医師は、忙しく働きながら知識や技術を習得しているだろうと思うと）医師としての焦燥感にかられたものであった。今でこそ、ITが発達し、どこにいてもインターネットを介して情報を共有できるが、当時は、そのようなものも、まだまだ普及しておらず、一人で悶々としていたこともあったが、そんな私に気遣って、自宅の玄関に朝早く、そっと採りたての野菜を置いていったり、新鮮な魚をもらったり、何かと気遣ってくれる島の人々の優しさに触れ、医師として最も基本的な人と人の繋がりを培ってくれた。島では、小児から老人、内科はもちろん、縫合や、簡単な骨折の処置などの外科的なこと、皮膚疾患、溺水やハブ咬傷、交通外傷などの救急疾患、痴呆や精神障害の患者の相談、又、予防接種や健康教育、往診（在宅医療：寝たきりや、末期がん患者）等、総合的な医療全般の知識が要求される。そこには、先端的な医療機器もなければ、病院のように、オーダーすれば、誰かがやってくれるわけでもない。すべて、自分の力量にかかっている。その後、中部病院に後期研修に戻り、消化器科を選択した。一日中、救急室に待機し、吐血・下血患者を見つけては、今は亡きY先生を呼び出しては、自分も検査に加わって、内視鏡を勉強させてもらった。その後、多良間診療所、久高診療所（那覇病院と併診）に赴任し、縁あって、浦添市のU総合病院に、内科・消化器担当として、就職した。消化器、特に内視鏡の分野では、今までの浅い知識・技術では、到底専門と称することはできず、積極的に学会発表を行ったり、琉大のK先生の担当日に、できるだけ時間を作って下部内視鏡の検査を見学させてもらい、大腸疾患を勉強させてもらった。又当時の病院長であったT先生の配慮で、私立病院では始めて、県人材育成財団より、国内派遣研究員として、国立ガンセンターで勉強させていただいた。10年間、U総合病院で専門医として、働かせてもらったが、平成13年9月、より身近な専門医を目指し、那覇市の新都心で開業した。開院時は、台風のたびたびの来襲や、アメリカ同時テロ、株価の大暴落にも見舞われ、この先どうなることかと心配であ

ったが、いいスタッフに恵まれたことや種々の方々の応援もあり、少しずつではあるが、外来患者数、検査件数も増え、現在にいたっている（4年半で、上部内視鏡検査3,200件余り、下部内視鏡検査1,400件余り）。振り返ってみると、およそ10年を節目に、新しい船出をしているように思える。来年からは、県立南部医療センター・こども医療センターの臨床協力施設として、研修医を受け入れることとなった。

これからも、試行錯誤を繰り返しながら、決して独りよがりにならず、地域に認められた自分なりの医療を、行っていければと思う。

タマンに会いたくて

那覇市立病院 小児科
伊波　徹

あれは忘れもしない昨年の6月10日夜11時過ぎのことだった。竿先の鈴が“チリン”となった。前アタリ（魚がエサを触っていること）だ。それから15分後、突然竿先が海に突っ込むほどに曲がった。“来た～”私は竿を手に取り、竿を立てる。鈴の音がけたたましい。ともすれば海に引き込まれそうになるほどの強力な引き。今までかつて経験したことのない引きだ。糸の強さ、竿とリールの性能を信じ、強引にリールを巻いていく。鼓動の高まりを感じつつ、興奮のボルテージは一気に最高潮へ。10分ほどのやりとりの後、奴は姿を現した。強引に奴を海から陸地へゴボウ抜く。タマンだ。気がつくと両腕、両足の筋肉痛、全身の虚脱感でその場にしゃがみ込んでいた。しばらくして呼吸が落ち着き、あらためて釣り上げたタマンを見た。デカイ！（後の計測で64cm、3.7kg）狙った獲物を手にした満足感がじわじわと湧いてきた。これが私にとって初めて釣り上げた大型タマンだった。以来私はタマン釣りの魅力に取り憑かれてしまった。

和名「ハマフエフキダイ」方言名で「タマン」と呼ばれるこの魚はスズキ目フエフキダイ科に属する。沖縄では県魚の「グルクン」と並ぶポピュラーな魚と知られ、糸満市では市魚となっているほどである。沖縄近海に多く生息し、最大で80cmほどにもなり、釣り対象魚としては大型の部類に入る。夜行性で非常に光に神経質なため基本的には夜釣りで狙う。タマンの魅力と言えばなんと言っても引きの強さである。“磯のスプリンター”と言われるほどで一気にダッシュするその引きは強烈である。それに加え美味な白身も持つ。まさに“釣って良し、食して良し”の魚であり、とても人気の高い磯釣り対象魚なのだ。

現在、私は『H研究会』というタマン釣りの愛好会に所属している。この会は会員総勢40名ほどで、職業も様々で釣り歴30年以上のベテランから私のようなビギナーまでタマン釣りに魅せられた人々の集まりだ。月1回、会員の親睦も深めながら、いかにして釣果を上げるか勉強会を開いている。この会に集まる人々のタマン釣りに対する熱意は半端じゃない。熱く語る釣り談義はほんとにおもしろく、勉強になる。どんな釣りでもそうだが、魚を釣り上げるためにはエサ、道具、仕掛け、潮の満ち引き、天候、場所などの条件があり、その条件がうまい具合に絡み合った時に初めて釣果が出る。確かにマグレで釣れることもあるが、コンスタントに釣果を出すことは容易なことではなく、様々な努力、工夫が必要である。例えばエサが自然にみえるためにはハリをどのようにかければ良いかとか、風の強い日にはハリス（下糸）は短めで良いが、風のない日には長めにしたほうが良いなど、なかなか奥が深いのである。

『H研究会』も発足1年が過ぎ、タマン釣りのオピニオンリーダー的存在にもなってきた。（下っ端の私が言うのもなんだが・・）そしてタマン釣りも様々な問題を抱えている。これはタマン釣りに限らず、釣り全般に言えることだが、ひとつに釣り場のゴミ問題がある。釣場を

訪れてわかることだが、ゴミが多い！ゴミも使ったハリスや釣り道具の包装紙、ペットボトルや飲み物の缶、タバコの吸い殻など様々である。その中で目に付くのはスーパーやコンビニなどでもらうビニール袋である。このビニール袋は景観を損なうだけではなく、海の生物にも悪影響を及ぼす。死んだ海亀の消化管の中から多量のビニール袋が出てきたというニュースを聞いたことがある。死因は好物のクラゲと間違えてビニール袋を食べ、消化できずにイレウスになったためとの見解だった。海水に溶けないため何年も海面を漂うその姿は海亀の目にクラゲと映っても不思議ではない。一部の心無い釣り人（釣り人ばかりではないと思うが）のため釣り禁止となった港や漁港もあると聞く。このままだと近い将来釣り場がなくなる可能性もある。『H研究会』でも会員にゴミの持ち帰りを徹底させている。私も“釣り場は来た時よりもきれいに”をモットーにできるだけ多くのゴミを拾い持ち帰るよう心がけている。もうひとつの問題としてタマンという資源枯渇の危機がある。ベテラン釣り師である会員が“ここ1～2年大型が少なくなった。”と言っていた。実際、今年の会員皆の釣果をみても60cm以上は少ない。もちろんこれだけで絶対数の減少を断定することはできないが、しかし釣り人ばかりではなく、漁業も含めてやみくもに小型サイズまでも釣り上げてしまっては近い将来絶対数の減少も現実となるだろう。その打開索として稚魚の放流、禁漁区域および禁漁期間の設定、小型サイズの禁漁などがあげられる。稚魚の放流は各地の漁協や日本釣振興会などが定期的に行っており、石垣島のある地域では禁漁区域および禁漁期間の設定している所もある。『H研究会』でも微力ながらも貢献したく、40cm以下はリリースすることが会則となっているし、今後独自で稚魚の放流も検討している。自然破壊が止められ、魚の成育環境が守られ、釣り人ひとりひとりがマナーを守ることで釣り場が保全される。そうなって初めて、釣りを楽しむことができ、次世代のこどもたちへ釣りという文化を受け継ぐことができる。

あの日以来私はタマンに会えずじまいで、毎回ボウズ（魚がまったく釣れないこと）が続いている。最近は家族も“釣れた？”と尋ねなくなり寂しいかぎりだが、たとえボウズでも日常の激務から開放され、釣りができることは喜びである。しかし狙った魚を釣り上げることができれば尚楽しいことは言うまでもない。あの興奮・快感をもう一度味わいたく、休みの夜毎大型タマンを求めて竿を出している私である。

メンタルヘルスというけれど…

医療法人社団 日本ウエルネス
ハートセラピークリニック
真泉　文江

ここ数年の間にうつ病で治療する方は増えています。20年前の5倍に増えているという話もあり、年間の自殺者が3万人を超える事態が8年間も続いていることもあって、うつ病、うつ状態への関心は高まっています。メンタルヘルスの講習会も企業や公的機関で積極的に取り上げられて、かつてのような精神疾患への偏見は薄らいできたように感じていました。他の病院を受診したら異常がないので心療内科を勧められた、と仰って来院する方も多いので、早期治療できる方が増え、治療しやすい環境も整ってきたように感じます。この点に関しては他科の先生方に心から感謝しています。本当に有難うございます。

ですが、そう安心していたところに思わぬ出来事が幾つか重なって起きました。一つは、治療のために休職していた女性の方が復帰を前にした時のこと。過去に1年休職し復帰したのですが、部署異動になったこともあって初めての仕事をどうこなして良いか分らない、他の人たちは皆忙しそうに働いているので分らないことを聞くことが出来ない、仕事は捗らず元々几帳

面で完璧主義なので仕事がこなせない自分が嫌になる、ということでうつ症状が再燃し3ヶ月で再度休職に入りました。それからまた1年休んだ後に復帰するつもりでいると、職場の方から「今度こそ大丈夫なのか、本当に仕事に復帰する気があるのか（復帰したいから治療を継続しているのに－以下（　）内は私の独白です）、復帰の意志があるのなら何故休職期間中職場に顔を出したり、生活状況を報告してこないのか（プライバシーの侵害？）、長期間自宅療養するより入院治療すべきだったのではないか、主治医の治療方針や医学的判断は正しいのか（治療への不信感を煽って治療関係を壊そうとしている？）、次の復帰の時には再休職は認めない（暗に退職を迫られている？）」といったプレッシャーをかけられ、うつ状態が再発しています。彼女は国家公務員なので小泉政策の一つである公務員削減のあおりを受けているのだろうか（弱者から切り捨てていこうとしているようで不快です）と勝手に想像していますが想像だったらどんなに安心でしょうか。ご本人にはこんな話は聞かなかったことにして復帰の準備をしましょうと伝えましたが、結局向うの手の内にはまって休職延長、自主退職という道を辿ることになるのでは、と危惧しています（私の被害念慮だと良いのですが）。

次は休職に入って間もないやはり女性の国家公務員の話。口では「心配しないでゆっくり休んで良くなってから復帰するように」と言いながら、定期的に携帯に電話を入れて面会を設定し、仕事の状況を事細かに聞かせる上司がいます。休職に入る前には「半年間の自宅療養が必要」と診断書を提出しているのに、休職は3ヶ月にして元気になったらすぐに復職出来るようにしたほうが良いということも言っていました（ご本人は真面目で対人関係に過敏な方なので言われるままに3ヶ月で手続きしようとしましたが、家族の反対で半年の休職を取りました）。部下が休職しているとキャリアアップの妨げになるのかしら、とこれも要らぬ心配をせざるをえない状況です（民間企業でこんな不快感を体験したことはなかったような気がします）。まだまだ簡単には治療環境は整わないな～、と思っています。

発症に関しても気になることが幾つかありますが、最大のものは「過労」です。産業医活動をするようになって初めて知って驚いたのですが、一ヶ月の残業時間が100時間を越えることが稀ではないのです（最近は200時間を越える人をみることもあります－聞いたときは倒れそうになりました）。こんなに働いても企業が黒字になるとは限らず、お給料も満足できるほど充分もらえるわけではありません。これでは肉体的・精神的疲労からうつを発症しても不思議ではありません。長期療養者に占めるメンタルの問題の比率が高いことも当然のことのように思えます。息子さんを自殺で亡くされた女性が、亡くなるまで精神的に追い詰められているようには全く見えなかった、確かにここ1年夜遅くまで働いて朝早く出かける生活をしていて疲れたとよく言っていたし、よく風邪を引いていたので亡くなる2週間前にも内科に行ったけれど異常ないといって帰されただけだった、と仰っていたのですが、これも過労が背景にあったと思うのです。メンタルヘルスを取り上げる前に社会全体で労働時間を減らす（残業を減らす）努力をしたほうが良いのではないかと私は思います。充実感を持って働き、夕方にはさっさと帰って家族と楽しく団欒を過ごし、夜は十分睡眠をとって朝はすっきり目覚める、ただそれだけで精神的安定が得られるのではないかと思います（そんな単純なことではないのかも知れませんが）。

以上雑感を書きました。ご拝読有難うございました。